

Title	書評: 田中重好著『共同性の地域社会学 : 祭り・雪処理・交通・災害』ハーベスト社、2007年
Sub Title	
Author	石井, 清輝(Ishii, Kiyoteru)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008.) ,p.119- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：田中 重好著

『共同性の地域社会学—祭り・雪処理・交通・災害』

ハーベスト社、2007 年

石井 清輝

本書は著者の 20 年にわたる津軽地方を中心とした実証的な地域研究の成果を踏まえ、地域社会における共同性の持つ意味や可能性を様々な角度から検討するものである。ここで分析の対象となる領域は、祭礼、雪処理、公共交通、災害と多岐にわたる。近年の地域研究の成果の中でも、実証研究の水準、分析概念の切れ味の鋭さと射程の広さ、論証の説得力という点において群をぬいている。また、これまで地域社会学が取りこぼしてきた問題関心や研究領域に対しても、数多くの問題提起を行っている。地域研究に取り組む研究者は、本書との対話から極めて豊かな発想や刺激を与えられるに違いない。評者もはるか後方から地域研究を志す後輩として、本書の水準の高さに圧倒されると共に、多くを学び、様々な研究関心や発想を触発された一人である。本書には取り上げるべき論点が数多く含まれるが、全てを論じるには評者の力量も紙幅も不足している。ここでは、本書のキーワードに沿って著者の基本的な主張を確認し、今後の地域研究に有するであろう意義について述べることにしたい。

著者の本書における状況認識と一貫したテーマは、終章において簡潔に述べられている。「戦後日本の『豊かな社会の実現』過程のなかで、個人と社会、個人と国家の中間に位置する地域社会において、『私化』という形で個人へ、もう一方の力が『行政化』という形で行政へと、地域社会のさまざまな事柄が分解していった。本書を貫くテーマは、その変化のなかで、なおかつ、私化と行政化に両極分解していった、その『中間』に何があるのか、その『中間』がいかなる可能性を持っているのかを考えることであった」(445 頁)。

この「中間」にあるもの、それが本書のタイトルにもなっている共同性である。戦後の社会変動の中で、人々は個人と家族という「私」の領域へと閉じこもり、私的な幸福を追求していった(私化)。しかし当然ながら、生活上の問題の処理は個人のみでは不可能である。そのため、私化の進行と共に、生活上の問題の処理を専門的な諸機関に委ねる「生活の社会化」の過程が進んだ。その多くは行政によって担われ、住民の行政への依存が深まっていった(行政化)。私化と行政化が同時進行していく中で、実際の生活は共同のハード・ソフトシステムに強く依存しているにもかかわらず、生活者の主観的な世界ではその共同性が「見えない」ものとなってしまった。本書の分析を貫く一つの姿勢は、生活者にとって見えなくなっている共同性を、さまざまな形で可視的なものにしていくことである。読者は祭礼や災害に関する分析を追っていくことで、我々の日常生活がいかに「見えない」共同性によって規定されているかに気づき、さらに非常時には生死を分けるものにまでなりうることを知って驚きを感じることで

ろう。

共同性と共に本書の中心的な分析概念になっているのが、「中間空間」＝「間」である。「間」とは、「私」と「公」を媒介していく結節空間である。その代表例が、住宅空間における外向空間である接客空間、縁側、ぬれ縁、軒下空間などである。これらは、私空間に取り込まれていき、急速に消滅していった。この「中間空間」の消滅は、地域社会における共同性に決定的な影響を与えた。なぜなら、地域的共同性は、「間」という「曖昧な」空間に支えられながら存続してきたものだからである。「中間空間」の消滅は、すなわち地域的共同性の衰退を意味しているのである。

現在の日本社会では、私化と行政化が共に限界に突き当たっており、その結果生じる問題をどのように乗り越えていくかが課題になっている。著者はこれらの問題を解決するためには、現代的な新しいコミュニティを再建する必要があると主張する。新しいコミュニティを構想してゆくとき、我々は「中間空間」＝公私の「曖昧な」空間を排除する方向で構想するか、それを活用、再生する方向で考えるか、という選択に立たされることになる。著者は「中間空間」を生かす形でコミュニティの再建の方向性を模索していく。共同性に加えて「中間空間」に著者がこだわるのは、このような理由による。特に雪国の生活を論じた第 3 部では、「中間空間」と地域的共同性の関連が鮮明に浮び上る。また、地域の公共交通を題材にした第 4 部では、公私の「曖昧な」空間に着目して、共同性を設計していくための具体案が論じられていく。

各章の実証分析では、観察、聞き取り調査、アンケート調査などの手法を組み合わせ、津軽地方の人々の生活や意識、災害時の行動などが極めて具体的に提示される。さらに、その結果がどのように共同性とかかわるかという解釈も、明快に語られている。そのため、それぞれのデータが有機的に結びつき、実証研究が陥りがちなデータの羅列や類型の提示にはない分析のダイナミズムと説得力を生み出している。

本書が今後の地域研究に有するであろう意義は数多くあるが、ここでは特に三点指摘しておきたい。

1 つ目の意義は、「共同体」に対して「共同性」という概念を提示したことにあるだろう。社会学において「共同体」といえば、多く農村のイエやムラを意味し、1960 年代にはその解体が議論された。そこでは、「共同体」は成員全員が避けて通ることのできない、義務的にかかわらざるをえないようなものであった。そのため、乗り越えるべき前近代的な封建遺制と捉えられ、その克服も議論されたのであった。しかし、「共同体」という概念は、その後急速に分析概念としての価値を失っていった。なぜなら、地域社会における「共同体」の代表的存在であったイエやムラは解体し、都市においてもその再生は見られなかったからである。とはいえ、地域社会における人と人とのつながりが完全に失われてしまったわけではなかった。地域社会学は、そのようなつながりを対象化する概念を模索し続けてきた。著者は、「共同体」に対して「共同性」を分析概念として用いることで、通時的、共時的な人々のつながりの対象化を可能にした。さらに、日常的／非日常的、顕在的／潜在的という共同性の区分を設けること

で、共同性の対象領域の拡大にも成功している。これは、新たに「共同性の社会学」という領域を開拓する試みとして、高く評価されるべきであろう。

2つ目として、地域社会学の政策科学化への道筋を明確に示した点である。本書の大きな特徴の一つは、極めて意欲的な政策提言への姿勢である。これは第4部の「共同性の設計」に限らず、全編を貫いている姿勢といえるだろう。著者も指摘しているように、日本の社会学は、政策科学としては未成熟である。今までの地域社会学においては、実証研究の成果を政策提言へと結びつける手続きに対する関心が低かった。そのため、豊かな実証研究の蓄積がありながら、実際の政策へと還元されずに終わることがしばしばあった。それに対して、本書は実証分析から政策提言までの手続きを具体的に開示している。地域社会学に限らず、政策科学化は社会学の今後の方向性として大いに議論されるべきであり、本書はその先駆的かつ有益な試みとして記憶されるだろう。

3つ目として、公共性論に対する意義が指摘できるだろう。現在、公共性は様々な研究領域で関心を集める概念になっている。その多くは、H. アレントや J. ハーバマスなどの公共性概念によりつつ、公・私・市民社会という三項対立の分析枠組みを持つものが多い。そこでは、それぞれの領域は截然と区別され、公を国家（行政）が担うか、理念的な市民社会が担うかを主な対立点として議論がなされてきた。このような公共性論に対して、本書ではむしろ公と私の重なりあう「曖昧な」空間に注目し、そこに公と私の区分のさらに基礎レベルにおける「われわれ」という共同性の領域の存在を見出している。公共性の基盤に共同性が存在することを理論的なレベルで主張するだけでなく、実証的な分析への道を開いたという点において、本書は特筆すべきものである。公共性の議論に新しい分析視角をもたらすものとして、今後の展開が期待される。

最後に、評者が本書に学びつつ今後自らの地域研究を進める上で、ぜひ著者にご意見をうかがいたいと考えた事柄を二点ほどあげておきたい。

まず、共同性をどの程度地域社会に関連づけて考えればよいのか、ということである。当然ながら、本書では「地域的」共同性が主な分析の対象になっている。この場合、共同性はどの程度「地域」という属性に結びついているのだろうか。確かに、コミセや流雪溝のように、特定の地域社会における「中間空間」と共同性が密接に結びついて存在している場合、その共同性を「地域の」共同性ということは可能である。しかし、著者も指摘するように、共同性は地域から離れ、広域化していった。このような状況において、改めて「地域社会の」共同性や「地域社会の」選択という場合、その「地域」というのは一つの全体や主体として想定可能なものなのだろうか。その場合、どのように「地域」という領域を確定すればよいのだろうか。既に農業集落や町内などの一元的な集団が地域的共同性を担う時代は終わり、その担い手も多様化している。そうであるならば、それでもあえて共同性を「地域」という属性に帰属させる理由があるのだろうか、と考えた。この点についてうかがいたいと思った。

もう一つは、今後の共同性のあり方についてである。著者は私化と行政化の行き過ぎを抑制

するために、コミュニティの再建が必要であると述べている。実際に、雪処理や災害などの、ある意味で「逃れられない」問題の発生に対しては、その差し迫った有効性が説得的に論じられていた。ただ、祭礼や公共交通という、より「オープンな」事柄においては、人々が地獄的なつながりを意識し、コミュニティによる対応という選択をする必然性が低くなるような印象を受けた。さらに考えてみれば、住民の複雑化、多様化、流動化を生み出す都市化やグローバル化の進展は、そのような機会や選択をより困難にする要因になることも考えられる。こう考えると、共同性の構想に際しても、それが有効に機能しうる特定の対象領域や地域社会的な条件というものがあるものであろうか、という疑問をもった。以上の点について、改めてご教示頂ければと思った次第である。

[本体価格 9,345 円]

(いしい きよてる 城西大学非常勤講師)